

# 幼保小の円滑な接続に向けて

えりも町立えりも小学校 学級数8 (校長 佐藤 裕哉)

## 実践の概要

町内の幼児教育施設との合同研修や架け橋期のカリキュラム作成のための会議を通して、第1学年児童と幼児の交流の機会を充実させ、スタートカリキュラムの実践と検証を行うなど、町内全体で目指す子どもの姿を共有しながら、架け橋期の取組の充実を図っている。

## 1 実践の目的

えりも町では「えりもの子はえりもで育てる」をモットーに掲げている。本実践は、出生から高等学校卒業時(0歳から18歳)までの円滑な接続に向け、幼保小がより一層密に連携することにより、「考える子 思いやりのある子 たくましい子」というえりも町の目指す子ども像の具体化を目指す。

## 2 実践内容

### (1) 実施計画

- ・合同研修・視察研修への参加、関係機関との連携による取組の充実
- ・幼児教育施設との交流の充実
- ・架け橋期のカリキュラム及びスタートカリキュラムの実践と検証
- ・「幼小連携・接続のチェックシート」を活用した取組の検証

### (2) 取組の具体

- ・町内幼保小職員を対象とした合同研修に複数回参加するとともに、美瑛町や滋賀県近江八幡市への視察を通して、幼保小職員間の日常的で継続的な交流と連携の重要性を学んだ。また、カリキュラム実施時において、第1学年学級担任が町教委幼小接続アドバイザーから継続的な支援・助言を受けたことにより、幼小の円滑な接続につながった。
- ・7月に第1学年児童が幼児教育施設を訪問し、年長児との交流を行った。また、10月には、幼保年長児を小学校に招き、生活科の授業において、幼保小の交流会を実施した。さらに、2月の一日入学では、幼保年長児が図画工作科の授業を体験した。
- ・町内幼保小の担当職員が集まり、ワークショップ形式で架け橋期のカリキュラムの検証を行った。また、架け橋期のカリキュラムを基に、スタートカリキュラムについて、第1学年学級担任の「毎日手元に置いて使いたくなる指導の手引」とするため、校内プロジェクトチームを編成し、5月に校内で点検・評価を行い、成果と課題を共有した。
- ・実施した架け橋期のカリキュラムや幼保小の取組等について、幼児教育推進センターの「幼小連携・接続のチェックシート」を活用し、数値化した自己評価を行うなど、当町の現状と今後の課題を幼保小職員で共有した。



【幼保小合同研修】



【幼児教育施設との交流】

### (3) 取組後の点検、評価、工夫改善

- ・幼保小職員の合同研修や幼児教育施設との交流会を積極的に行い、幼保小の子ども・職員同士が互いを知ったり、子どもたちの成長について語り合ったりすることにより、えりも町の目指す子ども像の具体化に向けた取組を充実させることができた。
- ・目的を明確にした子ども同士の交流の充実や、目指す子どもの姿を明確にしたカリキュラムを実施・検証することにより、入学後の児童が安心して学習する姿が見られた。

### (4) 改善後の取組

- ・幼児教育施設と小学校の一層の連携を図りながら、スタートカリキュラムのさらなる精選に取り組む。
- ・町保健福祉課、中学校、高等学校とも連携し、出生から高等学校卒業時(0歳から18歳)までの円滑な接続を目指した取組を充実させる。

## 3 実践のポイント

- ・町教委幼小接続アドバイザー、町内幼保小職員が中心となって組織的な連携強化を図ること
- ・えりも町の目指す子ども像の実現に向け、架け橋期のカリキュラム及びスタートカリキュラムを充実させること

# スタートカリキュラムの充実を図った幼小連携

奥尻町立青苗小学校 学級数 4 (校長 工藤 崇)

## 実践の概要

子どもたちの生活や学びの基盤を保障するとともに、幼児期の教育と児童期の教育を円滑に接続し、組織的に支えることができるよう、町内幼稚園と小学校、行政が一体となって連携し、子どもや保護者が安心・安全に小学校へ進学できるよう支援する環境や体制を整備している。

## 1 実践の目的

「発達の段階に応じた幼児理解と児童理解が充実すること」と「幼稚園と小学校が一貫性のある教育を展開すること」を取組のねらいとして、計画的に幼小連携研修会を実施する。

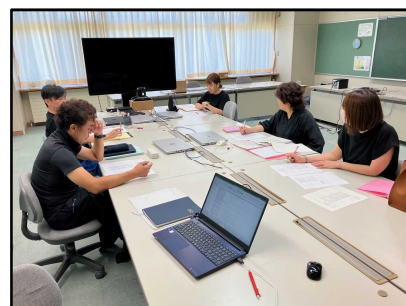
## 2 実践内容

### (1) 実施計画

- ・ 幼児・児童理解 ( 参観、カンファレンス )
- ・ 保護者アセスメント
- ・ 関係機関との連携
- ・ 教職員の特別支援教育に関わるスキルアップ

### (2) 取組の具体

- |       |   |
|-------|---|
| 4月～5月 | 幼稚園・小学校での幼児・児童観察<br>( 担任、管理職、町教委子ども支援担当職員：以下CS、教育相談員：以下SC )   |
| 6月    | 児童実態カンファレンス ( 小学校、SC )<br>幼稚園巡回相談 ( 医師、心理士、言語聴覚士、幼稚園、小学校、CS、SC )<br>配慮が必要な園児・児童のカンファレンスシート作成、保護者との面談、情報共有 |
| 7月    | 幼小合同カンファレンス ( 幼稚園、小学校、SC )  |
| 8月    | 特別支援研修会 ( 町内幼小中高職員対象 ( 町教委主催 ) )  |
| 10月   | スクリーニング検査   |
| 11月   | 幼小参観交流、幼小合同カンファレンス ( 幼稚園、小学校、SC )   |
| 12月   | 町就学指導委員会  |
| 1月    | 幼小合同研修会、WISC検査研修 ( 町内幼小中高職員 ( 町教委主催 ) )   |
| 2月    | 幼小合同カンファレンス ( 幼稚園、小学校、SC )  |



【幼小町教委による合同カンファレンス】

### (3) 取組後の点検・評価、工夫改善

SCが週に1日来校し、各教室を巡回することで、子ども一人一人の状況を把握し、情報共有できるようになったが、SCと学級担任が情報共有する際には、管理職や特別支援教育コーディネーターが介在する流れであったため、情報伝達に時間がかかる場合や細かいニュアンスが伝わらないことがあった。

そのため、SCと担任が直接話し合うことができる場面を設定したり、育ちのバックグラウンドを共有するためのカンファレンスを幼稚園・小学校の職員合同で実施したりすることとした。

また、年に2回行っているいじめアンケートにおける児童からの聞き取りを学級担任とSCがそれぞれ行うよう改善した。

### (4) 改善後の取組

幼小合同カンファレンスは初めての取組であったが、幼稚園では小学校に上がるまでの課題が明確になり普段の指導改善につながった。また、小学校では就学以前の様子を知ることによって児童理解が進み、家庭を含めた適切な対応や、学習・生活指導の改善を図ることができた。

## 3 実践のポイント

- ・ 幼稚園と小学校が、「幼小連携研修会」等の互いの教育活動について理解を深めるための交流の場を計画的に設定し、それぞれの場における教育活動の一層の充実を図ったこと
- ・ 就学の場や支援に関する判断を早くし、園児や保護者へのよりきめ細かなサポートを通して、特別支援学級の開設に向けた支援や環境の整備等に時間をかけたこと

# 小学校との円滑な接続に向けた幼小連携強化の取組

訓子府町立幼保連携型認定こども園 学級数 11 (園長 牧野 喜充)

## 実践の概要

本園は、平成28年に幼保連携型認定こども園として開園する前から訓子府町幼保小連携検討会議を発足し、小1プロブレムの対応に取り組んできた。昨年度からは「幼保小の架け橋プログラム」の推進に向け、新たに幼小連携会議を組織し、子どもの健やかな育ちを守り、支えるための連携・接続に取り組んでいる。

### 1 訓子府町幼小連携会議の目的(年に2回開催)

- (1) 幼児教育、学校教育に関する情報、引継ぎ内容、連携に係る支援や工夫等の共有・実践
- (2) 幼児が小学校への就学に期待感を高め、児童が自分の成長を実感できる環境づくり

### 2 実践の内容(幼小連携会議の目的を受けて、こども園としての取組)

#### (1) 実施計画

幼児・児童の交流を積極的に行う。

園内研、校内研への参加等、保育者・教職員の交流を活発にする。

引継ぎの内容や支援を要する幼児への配慮等の工夫改善を図る。

アプローチカリキュラムの実施、工夫・改善とスタートカリキュラムへの助言を行う。

保護者、地域との情報等の共有及び啓発活動の充実を図る。

#### (2) 取組の具体

幼保小の架け橋プログラムについて、指導主事や道幼児教育相談員を招聘して学習会を開催した。

保育者を対象に、小学校第1学年の教科書の内容に係る学習会を行った。アプローチカリキュラムの現状と課題を明確にした。

保育公開の際、町内小・中学校の教員に参加を呼びかけ、研究協議にも参加してもらった。

小学校の児童を園行事に招待したり、幼児の散歩において、小学校施設を利用したりするなどの交流を行った。

訓子府町幼小中高校連携親睦交流会(町教委主催)に参加して、保育者と教職員の交流を行った。

幼小連携の取組について、園便りで保護者へ分かりやすく伝えた。

保護者の小学校入学に関する不安解消のため、入学の準備に向けた通信「いっぽ」を作成した。

#### (3) 取組後の点検・評価、工夫改善

研究協議に参加した小学校の教員からは、参観のポイント(評価の観点)が分からない、指導案の見方が分からないなどの意見が出た。また、「到達目標」と「方向付けを重視した目標」、「教科カリキュラム」と「経験カリキュラム」等、小学校とこども園の違いや、こども園における「10の姿」や「遊びが学び」であることの理解が小学校で進んでいないなどの課題が明確となった。この溝を埋めるためには、保育者と教職員の計画的な交流を継続し、互いの教育に対する理解を深める必要がある。

#### (4) 改善後の取組

こども園と小学校の双方で、交流行事を年間指導計画に明確に位置付ける。指導案(展開案)の工夫改善を幼小連携会議で行う。

こども園の活動、小学校の授業をそれぞれ動画に録って交流することにより、研修の充実を図る。

小学校の課題意識を高めるために、幼小連携会議の事務局を1年ごとに交代しながら担当する。

### 3 実践のポイント

- ・こども園から高等学校まで一貫した教育を目指す独自の学校運営協議会を組織して取り組むこと
- ・子どもの健やかな育ちを見守り、支えていくために、自治体や関係機関が連携すること
- ・幼児が安心して小学校へ就学するために、こども園が中心となり、関係機関と連携を図りながら計画的、継続的な幼小の交流を行い、課題を一つ一つ解決していくこと



【研究協議の様子】

月	1月
●	給食の盛り付けや牛乳パック開きを小学生のようにやってみよう。 ➢ ご飯と汁物を個人でようところから、当番によそってもらおう。 ・ 小学校の行い方を知り、やってみよう。 ● カルタ取り、トランプ遊び、ドッジボールなど ・ 友達と一緒にルールを守りながら遊びを楽しもう。 ・ 字や数字に親しむ。 ● お寺訪問(節分)(1月下旬) ・ 豆まきの由来を知る。 ・ いろいろな人の話を聞く経験をする。 ● 誕生会出し物 練習・披露(中旬~下旬)→ ➢ 学級で相談して、取り組んできた出し物を発表する。(踊り・手品・ヘアサートなど) ・ 友達思いを出しながら、協力して練習に取り組み。 ・ お祝いする気持ちを持ち、自信を持って発表する。※ 出し物は、お別れ会と同様な場合が多い。 ● 園小ふれあい集会(1月) ➢ 園小に行き、いろいろな遊びの環境で楽しく過ごす。 ・ 小学生との触れ合いを楽しむ。 ・ 施設を知り、入学に期待を持つ。 ● 書検作り(下旬から2月上旬まで) ➢ さむさむまつりに向け、学級で考えた書検をみんなで作る。 ・ 友達と意見を出し合い、協力して作る。 ・ みんなで作った喜びを感じる。

【アプローチカリキュラムの見直し】

## いっぽ

～スムーズに小学校入学に向けて～

発行: 訓子府町立幼保連携型認定こども園・訓子府小学校・徳武小学校  
(町教委教育課の協賛)

発行 令和4年12月20日 発行

【はじめに】  
ご家庭でも小学校入学の準備が出てくる頃ではないでしょうか。毎年、春休み明けの時期に、「取組の進捗に子どもにどんなことが必要なの?」といった不安や心配の声が保護者の方から聞かれます。子ども達みんなの不安の心配を解消し、訓子府町の連携型認定こども園(こども園)から、小学校へ入学する準備を進めていくこと、進んでほしいと思います。進んでほしいと、お知らせします。お子さんの成長を喜びながら、就学に向けての不安を取り除き、入学への準備に役立てていただければ幸いです。

### 1、学校は楽しいところ

新しい環境というのは、子ども達にとって期待と不安がかりあふれる気持ちになると思います。少しでも、子ども達の不安を取り除くために、小学校は楽しく勉強したり、遊んだりするところだということをお話してあげてください。

【入学の準備に向けた通信「いっぽ」】

## 幼保小の架け橋プログラム

ネット上で「架け橋プログラム」のやり方を学びましたら、子ども達も大人が口伝を聞き、進め、架け橋(異年齢教育)前後の5歳児から小1(2年)に相対し主体的・対話的に家・学びの実践を認め、一人一人の準備に合わせた上で次の学びや生活の準備を促すことと目指しています。～とありましたが、これでわかりますか?

### こども園から小学校へ段階ではなく、スムーズにつなげる

小1に入学したときのことで、入学前から3日後、保護者から「子どもが「学校」に行きたくない」と言っている。」「と聞いて、すぐに入学します。それでこども園の遊びや生活の中心から入って、4日分間隔について先生の話が聞けずじまいです。入学して1週間は2時間授業で終わります。給食もほとんどありません。教科書も最初だけ見せて、さまたげを解決し、スムーズに移行することができると言われていました。進め方がよくないと感じていました。子ども達、全体的に生活面での取り組みが足りていません。

※幼保連携は、5歳児の小学校入学に向けての課題ではなく、0歳から始まると思っています。

【園便り】

# 「遊び」と「学び」の相互理解に基づく幼小連携の取組

士幌町幼保連携型認定こども園なかよし 学級数9 (園長 渋谷 浩)

## 実践の概要

本園は、平成20年4月に、幼稚園と保育園を一元化し「幼保連携型認定こども園」として開園した。平成30年実施の教育・保育要領に示された「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」(以下「10の姿」)を念頭に主体的な深い遊びを支える保育の在り方について実践を推進している。

### 1 実践の目的

教育・保育要領、小学校学習指導要領の内容を踏まえ、園内における研修活動や教育・保育実践を行うことが重要であることから、「10の姿」を柱に、こども園と小学校間で互いに幼児期における「遊び」と小学校における「学び」の目指すところを共有し、相互理解することで、こども園と小学校の円滑な接続に向けた取組を推進する。

### 2 実践内容

#### (1) 実施計画

- 生きる力を育む10の姿を踏まえた園内研修の充実
- 生きる力を育む10の姿を踏まえた保育の質の向上
- 小学校への円滑な接続に向けた幼児・児童間交流
- 発達や学びの連続性及び生活の連続性の視点に立った小学校教員・ALTの乗入れ

#### (2) 取組の具体

生きる力を育む10の姿を踏まえた園内研修の充実

職員会議や研修の時間を活用して、「10の姿」についての理解や幼児教育と小学校教育双方の目指す方向や理念について全教職員で共通理解を図るとともに、学校教育における「資質・能力の三つの柱」「主体的・対話的で深い学び」「個別最適な学びと協働的な学び」と幼児教育との関連についての協議を通し、小学校への接続を意識した取組の重要性について理解を深めた。

生きる力を育む10の姿を踏まえた保育の質の向上

小学校教育の経験者による模擬授業を通し、保育教諭に学びに求められる要素(話し方や聴き方、わからないことは聞く、仲間で協力して学ぶ等)についての理解を促すことにより、主体的な深い遊びを支える保育の質の向上に向け、日常の保育活動の見直しを行った。

小学校への円滑な接続に向けた幼児・児童間交流

小学校への就学に関わる不安の解消と期待感の醸成を図ることを目的に、小学校第5学年の児童が案内役となり、「小学校たんけん」を実施することで、幼児・児童双方の次年度に向けての意欲を高めるようにした。

発達や学びの連続性及び生活の連続性の視点に立った小学校教員・ALTの乗入れ

園が実施した模擬授業に小学校の特別支援教育コーディネーターなどに見学に来てもらい、就学に向けた情報を共有するとともに、園児を対象とした小学校教諭による模擬授業、ALTによる英語あそびの活動の実施を通し、小1プロブレムの未然防止の取組を行った。



【ALTと年長児の英語あそび】

#### (3) 取組後の点検・評価、工夫改善

園の研究主題に掲げている「主体的で深い遊び」に向けた言葉かけや環境設定、グループワークや異年齢交流を通し、就学を楽しみにする幼児の姿が見られるようになるなど、幼児と児童、保育教諭と小学校教諭「遊び」と「学び」の相互理解を深めることができたことから、幼保小の連携強化に向け、相互交流の場を設定した。

#### (4) 改善後の取組

コロナ禍で制限されていた多様な場面や人々の中で「個別最適な遊び」や「協働的な遊び」を育む取組の推進、こども園と小学校の幼児児童間、教職員間交流により、互いに相互理解の深まりが見られた。

### 3 実践のポイント

- ・幼児児童同士や教職員間の交流等の取組を通し、「遊び」と「学び」の相互理解を深めたこと
- ・小学校への円滑な接続を意識した保育の在り方について教職員で共通理解を図り、幼小連携の取組を軸とした実践を推進したこと